

心と夜：短歌

著者	雅男
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 6
ページ	1 0 2 - 1 0 3
発行年	1918-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/6789

心と夜

英法三年

雅

男

シグナルの赤き火見つゝ鐵のごとつめたき土に立てば淋しもしみじみとしめれる道の土の香をなつかしむ夜の我が心はも我が息のかすかに白く湯氣となり暗に消え行く頃にもあるかなひたひたと寄せ來て波のさりげなく退けるが悲し我が心より心なるうつろの影のさみしさに今日もひねもす人を思ほゆ何やらむ心の底に悲しみの源泉あるごとし泣きもあへなく飲めばすぐ唄ふが癖となりけりさがごし言へば悲しきものを飲めば酔ひ酔へば泣くてふ我が友のならひはかなし今もかはらず夜を寒み眠りたらはすそこはかと物を思うて今日も暮るゝか海蛇の瞳の如き星一つ空にかゝれりきさらぎの夜いつしらに降り出し雪の降もやまず我が心ただ火の如きかな霜深くおる夜はひとり部屋ぬちにこもりて物を思ふなりけりふとものにおびねしごとく仰ぎ見し時計の針は動かざりけり快き炭火のほてり湯上りの身にしみじみと嬉しかりけり

快き火を抱きつゝ、まだも我れ手をすゝやます夜は更け行くに
夜もすがら戀の心をひやゝかにかへりみなどす外は雪の音
相見ねば心し更にへだたりて我に甲斐なき君と知らずや

下宿の燈

一三兩 默

○花陵會を去る

住みなれし會館を後に荷を引けばマリヤの顔のうるほひて見ゆ
怒りては何かあらむと出しかど下宿の燈うすくらきかな。

○或人の悲しき身上を聞きて共に泣つゝ

その人の他行を送る日及びその後二日

むせびつゝとぎれ／＼の息の間に我はおの／＼枯草のごと
なぐさめん力なければ我は身を君に投げてぞ一夜なきけり。
苦みは君より我にうつりしか君や靜に泣く我を見る
我が去りし後はわがごと他の人を君や愛すると彼は問ひけり。
わかち難きたもを切に別ちけり我が去る後は誰と泣くらむ。

鳴